

古代の外交：大陸との交流

秋田城は日本海への地理的近さから、国際的な外交の窓口となった。当時、大和とアジア大陸の国との外交関係は、贈り物を携えて大陸との間を行き来する大規模な使節団によって維持されていた。

秋田城は、古代の王国、渤海からの使節団の玄関口であった。渤海は、満州、外満州、朝鮮半島北部の大半を支配していた国である。渤海の役人は、727年から795年の間に6回にわたって出羽国に上陸し、秋田城に立ち寄ったと考えられる。その後、大和朝廷の代表者と面会するために南の奈良まで旅をした。

秋田城跡の発掘調査では、外交使節団が滞在したと思われる場所に関する手がかりが発見されている。当時としては最新式の衛生設備であった水洗トイレの跡が城跡のすぐ東側で発見された。排水溝から検出された有機物には豚肉にしか寄生しない種類の有鉤条虫卵が含まれていた。当時、日本では豚肉は食べられていなかったが、大陸からの料理には豚肉が使われており、外国の役人がこのエリアにあった寺を迎賓館的に利用した可能性を示唆している。また、8世紀に外交関係が活発化した時期にこのトイレが造られ、9世紀に渤海が使節団の派遣を停止すると撤去されたが、それもこの説を裏付けている。